

材木岩氷室 (白石市小原字上台)

明治時代、小原地区は養蚕・製糸業の盛んな地域でした。ところが、明治時代の初め頃は養蚕に欠かせない蚕種(蚕の卵)を地区内でつくることができず、福島県伊達郡から入手していました。

しかし明治13年、古山長吉氏が小原黒森で天然の風穴(ある地点だけ一年中冷風が吹き出す自然現象)を発見し、これを利用して蚕種貯蔵のための施設をつくり成功しました。これが氷室です。氷室は三方を石組みした中に簡素な小屋を建てた簡単な構造でした。やがて、小原地区のあちこちで風穴が発見され、明治40年頃までに多くの氷室がつくられました。材木岩氷室もそのひとつです。その後、材木岩氷室は大正時代に生糸の値段が大暴落したため廃絶されたとみられますが、2棟の氷室の跡が残っていました。

現在の建物は絵馬に描かれた氷室の様子などをとじて新たに建てられたものですが、身近な自然現象をうまく利用して生活の中に取り込んだ、先人の賢い知恵を今に伝えています。

氷室は周囲の環境をほとんど変えることなく活かしてきた人間と自然の共生の好例といえるでしょう。



万葉館発行社蔵絵馬



(上) 蚕種(蚕の卵)
(中) 蚕を食べる葉
(下) 繭(蚕糸)

材木岩氷室(白石市小原字上台)
この氷室は、明治13年、古山長吉氏が小原黒森で天然の風穴を発見し、これを利用して蚕種貯蔵のための施設をつくり成功しました。これが氷室です。氷室は三方を石組みした中に簡素な小屋を建てた簡単な構造でした。やがて、小原地区のあちこちで風穴が発見され、明治40年頃までに多くの氷室がつくられました。材木岩氷室もそのひとつです。その後、材木岩氷室は大正時代に生糸の値段が大暴落したため廃絶されたとみられますが、2棟の氷室の跡が残っていました。

「氷室」とは昔の冷蔵庫です。ここでは氷室が天然の風穴を利用してつくられているため、夏でも冷たい空気で満たされ、とてもひんやりとしています。この氷室の発掘調査を行った際に石積みにはタバコの煙をかざしてみると、煙は石積みのすき間から氷室内部に向かってなびき、冷風が吹きだしているのをはっきりと確認することができました。

では、なぜ風穴では冷たい空気がでるのでしょうか？
それはどうやら地盤と関係があるようです。岩は温まりにくく冷めにくい性質をもつことから、気温の高いときに空気が岩に触れると空気が冷やされます。冷くなった空気は重くて下に沈んでしまい、山の下の岩のすき間から吹きだしてくるため、風穴ができると考えられています。材木岩周辺の地盤は安山岩で構成されていることや、風化などによって破砕された岩が山の斜面に厚く堆積しているといった条件がそろっていたため空気が通り抜けやすく、風穴となったのでしょう。冬には夏とは逆に、周囲が寒いときでも岩がわずかに空気を暖めるため、風穴内は夏は涼しく、冬は若干暖かく、といった環境が保たれるのです。

氷室と風穴

氷室があたえてくれたもの

養蚕は農家が副収入を得るための手段として江戸時代から重要な地位を占めていました。特に福島・山形両県は名高い生糸の産地として知られ、白石市に隣接する福島県伊達郡では養蚕・製糸業が非常に盛んで、蚕種を各地に供給しているほどでした。明治の初めまでは小原地区でも蚕種を伊達郡から入手しており、卵は運搬しやすいように「種紙」を箱に入れた形で搬送されてきました。

「種紙」というのは厚手の和紙の表面に蚕の卵を産みつけさせたもので、タテ35.5cm×ヨコ22.5cmほどの大きさです。なんと、1枚当たり産みつけられていた卵の数は4~5万個もあったといわれています。当時1箇のメスが産む卵の数は350~400粒ほどですから、種紙には125歳以上のメスが必要になる計算です。

卵は自然な状態で置いとくと孵化してしまうため、秋蚕種(秋に蚕を飼うための卵)の保存には孵化の時期をずらすことが必要でした。しかし小原ではその施設がなく、暖かい季節に蚕種を保存しておくことができませんでした。

明治13年、古山長吉氏が小原黒森で風穴を利用した蚕種の貯蔵施設(氷室)の建設に成功して以来、長期の保管が可能になったばかりか徐々に蚕種製造も盛んになり、蚕種の供給もできるようになっていきました。「小原村史」によれば明治45年度の小原地区全体の蚕種の貯蔵量は「十万余ニラザレバシ」との記録が残っています。

また、長期間保管できる施設ができたことは生糸生産の増加にもつながりました。都合のいい時期に卵をかえすことが可能となったことで、年に3回の養蚕を行なうことができるようになったのです。これにより養蚕は農家の収入の大きな部分を占め、氷室の利用は大正時代まで続きました。

氷室は小原地区の産業の発展に大きな影響を与え、その歴史を今に伝えています。